



分科会 13 求められる地域連携・薬薬連携 —地域社会で薬剤師業務の展開を—

W-13-03 尾道地区における薬薬連携と地域医療連携

たなべ
田辺 ナオ

尾道薬剤師会 会長

〔はじめに〕

2001年2月～3月尾道薬剤師会は日薬の薬薬連携事業のモデル地区として、地域の基幹病院である尾道市立市民病院及びJA尾道総合病院の薬剤師とかかりつけ薬局間で患者の情報共有を図るために会をあげて取り組んだ。患者の入退院時に服用薬、アレルギー歴等の患者情報について情報連絡書を用いて連絡する試みであったが、患者に手渡した情報連絡書が相手先の薬剤師に届く割合は60%程度にすぎず、情報伝達手段としては患者への手渡しは不適切であるという結果が得られた。情報開示及び個人情報保護という条件をクリアするためには、医療機関にかかる時必ずお薬手帳を持って行くという習慣を定着させて、お薬手帳を患者経由の情報伝達手段として利用することが得策であると思われる。日薬の薬薬連携事業参加の結果、かかりつけ薬局として薬剤師が患者と十分なコミュニケーションをとることの重要性を痛感したが、また、事業により目に見える成果も得られた。

1. 両病院薬剤師と薬局薬剤師の関係が強化され、合同研修会を継続的に開くことが決定した。
2. JA尾道総合病院と保険薬局間でガン化学療法における連携強化を進めることとなった。
3. 両病院の地域連携室との関係が強化され、退院時カンファレンスへの薬局薬剤師の参加が継続して行われている。の3点が挙げられる。

〔緩和ケア薬学研究会〕

広島県東部の病院薬剤師が主体となって進めてきた緩和ケア薬学研究会に、昨年の薬薬連携事業を機に尾道薬剤師会からも、主催者側スタッフとして2名参加し病薬・薬合同研修会となっている。在宅医療に参加する上で緩和ケアは避けて通れない課題であり、知識やコミュニケーション能力の向上は、在宅医療の現場だけでなく薬局での実務に必須のものであることから薬局薬剤師の参加も増えている。

〔ガン化学療法における薬薬連携〕

副作用が発現しやすい抗ガン剤による治療も、支持療法が進みある程度副作用を抑えられるようになった。しかし、病院の外来でガン治療を受け、処方せんに抗ガン剤の記載が無い場合、保険薬局では、患者の受けている治療内容まで把握しにくいいため、副作用のチェックが困難であった。そこで尾道薬剤師会とJA尾道総合病院の協議により、副作用のグレードによる客観的な評価表を作成した。JA尾道総合病院薬剤師はガン化学療法を受けた患者に同意を得た場合、患者情報とともに副作用チェックシートを保険薬局に提供することとした。患者用の副作用チェック表も同時に提供しており、これは、お薬手帳のサイズに合わせ、手帳に貼って利用できるようにしている。病院薬剤師と保険薬局薬剤師の合同研修会で副作用チェック表の使い方を確認し、今後も利用状況を見ながら改良点を探っていくつもりである。研修会も回を重ねるにしがたい、双方のコミュニケーションが良好となり、「薬局で患者の同意を得られれば病院薬剤師に連絡する」「ガンに限らず、他の疾患にも拡大してほしい」など意見交換も活発になっている。

〔退院時カンファレンス〕

JA尾道総合病院、尾道市立市民病院で行われる退院時カンファレンスについては、病院の地域連携室から尾道薬剤師会の担当者に開催情報が提供され、薬剤師会より患者のかかりつけ薬局へ連絡している。患者の地域でのかかりつけ医が院内処方の場合なども、患者やスタッフの同意を得て薬剤師会から薬剤師を出席させてもらっている。また、実務実習中の学生にも見学の場を与えていただいている。退院時カンファレンスへの参加は、薬局薬剤師が地域医療連携に加わるためのきっかけとなると思われる。

〔今後の展望〕

尾道という地域医療先進地で薬剤師会としてチーム医療の輪に参加するためにさまざまな基盤作りをしてきた。具体的には1. 在宅支援講習会の開催（6回シリーズ修了）、2. 在宅支援チーム結成（24薬局参加）、3. 薬薬連携（具体的には前述）、4. 地域連携クリニカルパスミーティングに参加、5. 医師会やケアマネージャーへの薬剤師の訪問薬剤指導の依頼書の作成、配布など。しかし残念ながら思うように地域医療参加が進んでいないのが現状だ。今後は薬薬連携について言えば薬剤師同士が研修会などで顔なじみになれば情報伝達も円滑に進むことになるので病薬、薬合同研修会への多数の参加を呼び掛けたい。同様に、地域医療の多職種、得に介護保険の中心となるケアマネージャーとの密な連携も必要であると思われる。